

介護事業部 ヘルパーセンター 好事例シリーズ⑭

「当初家族は病院での看取りを希望されていたが、ヘルパーの介護を受けながら自宅で看取りたいと気持ちが変わり、実際に看取ることができたケース」

～事例分類～

健康状態 / 理解・行動 / ADL /

家事・IADL / QOL / **介護状況**

ヘルパーさんとのかかわりが
どんな変化をもたらしたのか、
読んでみるまも♪

まもりん



スライド全5枚

【事例情報】

○80歳代 ○女性 ○介護度5



【Before】令和3年3月

令和元年サービス開始、翌年同居の息子様が亡くなり独居となる。世帯別の娘様が泊まり込んだり、娘様がいない日はヘルパーが一日に3～4回訪問し生活を支えてきた。

令和3年3月末に带状疱疹を発症、娘様よりターミナルの状態との連絡が入る。昏睡状態となり、訪問看護師、訪問診療と相談し娘様は翌日までに意識が戻らなければ入院すると決めており、主治医も入院先を探していた。

【After】令和3年4月

いつも通り排泄介助でヘルパー訪問、昏睡状態は続いており、意識が戻らなければ入院＝終了かと予想していたが、翌日ケアマネジャーから、「ヘルパーの介助が素晴らしく、入院させずに自宅で看取りたいとご家族が希望している」と連絡がある。翌日の夜、ヘルパー訪問中に息を引き取られるが、パニック状態の娘様に落ち着くような声掛けをした。

亡くなった日の日中も訪問したが、娘様は「ヘルパーが介護をする様子を初めて見たが、自分や看護師がやっていたのは介護ではない、ヘルパーの優しいおむつ交換、声掛けが本当の介護だ、母が大事にされていたことがよくわかった、母は幸せ者だ」と言ってくださった。

後日ケアマネジャーから、娘様からヘルパー達に感謝の言葉があったことと、息を引き取った時に人生経験豊富なヘルパーと一緒にいたため安心できたと言っていた、と連絡があった。



経過

阻害要因・背景	サービス・ケア内容	サービス提供のねらい
死ぬときは病院でという一般的な考え、自宅で看取することはハードルが高いという固定観念	排泄介助、体位交換	昏睡状態ではあったがご利用者様本人にはいつも通りの声掛けといつも通りのケアを、娘様に対しては安心できるような声掛けを心がけた。



事例提出者からのアピールポイント

項目	内容
依頼は断らない。 感謝の気持ち。	<p>サービス提供責任者のアピールポイントは、懇意にしている他事業所からのケアマネジャーの依頼は断らないことだけです。今回のケースについてはご利用者様に対する今までのヘルパーたちのかかわり、介護技術のレベルの高さが評価されたと実感しています。夜間巡回チームはターミナルケアの依頼も多くありますが、今回のケースはお元気な時からのお付き合いだったので、精神的にも技術的にも別な意味で経験を積むことができました。</p> <p>さみしい気持ちはありますが、娘様からこれ以上ない言葉を言っていただき、ケアさせていただいていたご利用者様にも、気持ちの良い仕事をするヘルパーたちと仕事ができていることにも感謝しています。</p>

💡事例へのコメント💡

看取りのケアについては、家族、関係者ともにつらい思いがある中、ご本人、ご家族への思いに寄り添う支援を実施出来たこと、**最期までご本人の尊厳を大切にしたケアが出来たことがご家族のグリーフケアにもつながった事例か**と思います。看取りの支援としては、**ご本人が亡くなったら終了するように思われますが、ご家族などはそこから喪失体験を乗り越えていく事となります**ので、今回のように丁寧なケアを実践出来たことはとても素晴らしいと思います。

依頼を断らず1件1件のケアに真摯に向き合う姿勢を継続し、今後も信頼を積み重ねていきたいですね。

【札幌市社会福祉協議会 総務部】



私たちと一緒に 働きませんか♪

あぁあ

ヘルパー募集のご案内はこちら！



社会福祉法人札幌市社会福祉協議会
介護事業部

お友達を紹介して
ほしいまも



まもりん